

グローバル時代における宗教音楽の変容に関する 一考察：ゴスペル音楽とキールタンの比較から

小尾 淳 (大東文化大学国際関係学部)

A Study on Transition of Religious Music in the Global Age: A Comparison of Gospel Music and *Kīrtan*

Jun OBI

はじめに

本稿は、宗教音楽としての側面を保ちつつ、グローバル音楽市場を通じて幅広く受容されているゴスペル音楽（以下、ゴスペル）とインドの宗教歌謡キールタンの変容過程を比較考察するものである。具体的には、時代ごとの社会的背景と関係づけながら両音楽ジャンルが「グローバル化」に至るまでの過程を明らかにした上で、特に1990年代以降に展開した「越境」先における新たな受容状況に着目する。

グローバリゼーションは一般的に、ヒト・モノ・カネ・情報の移動が、旧来の国家や地域などの境界を越えて、地球規模に拡大して様々な変化を引き起こす現象として理解されているだろう。文化人類学者の江淵によれば「あるテリトリー内で行われていた現象が、別の場所で展開することを指すという『脱テリトリー化』を前提とした現象」であるという〔江淵 2000: 310〕。すなわち、グローバル時代には既存の社会的・地域的文脈を越えた関係性が容易に生じることから、人々が「異文化」に接触する機会が飛躍的に増加するといえる。

以上のような状況は音楽の分野にも多大な影響を及ぼしてきた。世界各地の音楽文化はボーダーレス化の傾向を増し、異文化の融合（フュージョン）が加速した〔塚田 2016: 143〕。一方で、特定の音楽が「他者」の人々の共感や支持を得て受容され、地域的特質に対応しながら変容していく「ローカル化」の現象も見られる。しかし、グローバル音楽市場において、音楽のボーダーレス化は珍しいことではなくなっているにせよ、特定の時代や地域の歴史的な文脈の中で必然的に生まれ、育まれてきた宗教思想を背景にもつ「他者」の宗教音楽が、「越境」した先で広く受容されている現象をどのように理解すればよいだろうか。

【ゴスペルとキールタンの比較の意義】

それでは、数ある宗教音楽の中からなぜ、ゴスペルとキールタンを比較するのか。筆者は次の3つの大きな共通点からその意義があると考え。第一に、両者は規模や時代は異なるものの、民族的な宗教音楽からグローバル音楽市場に移行した歴史をもち、ポピュラー音楽としても発展してきたことである。第二に、ボーダーレスな音楽として世界中で広く受容されている一方で、宗教音楽としての伝統も尊重されているという両義性をもつことである。第三に、両者がグローバリゼーションを背景に、様々な地域に越境し、「他者」である担い手とその普及に能動的にかかわっている状況が見られることである。ゴスペルの場合、クリスチャンが全人口の1%にも満たない日本において、非クリスチャンの人々が神(God)やイエスへの賛美や感謝を力強く情熱的に歌う[早稲田2016:125]様子は珍しいことではなくなっている。また、筆者はカナダでの調査において、様々な宗教的バックグラウンドをもつ人々がキールタンを愛好し、普及に尽力する様子を確認した¹⁾。

越境した文化は、それを受容する人々の歴史的、社会的、文化的経験に応じて再解釈されるといえる[早稲田2016:126]。ゴスペルとキールタンは宗教音楽としてのルーツをもちながらグローバル時代の複雑な文化の関係性の中で広く受容され、社会現象にまで発展している稀な例であり、両者の比較は、今日の異文化受容の特異性を明らかにする上で意義のあることと考える。

【先行研究】

次にゴスペルとキールタンそれぞれの先行研究について述べる。ゴスペルに関しては、民族音楽学、歴史学などの分野で厚い蓄積があるが[ヘイルバット2000;北村2001;Darden2004;塩谷2010]、「異文化受容」の視点からの研究はまだ多いとはいえない[例えば、Waseda2013]。

キールタンに関しては、主にインドの諸地域に根差した宗教音楽・民族音楽として捉えた研究が見られる[Slawek1988,1996;Novetzke2008;田中2008]。一方、現代の欧米における受容と展開に言及した研究は音楽社会学、宗教社会学の分野で散見されるものの、まだデータの蓄積は少ない[Delciampo2012;小尾2015]。

そこで、本稿ではこれらの先行研究を参考にしつつ、両者がグローバル化に至るまでの経緯を明らかにすると共に、1990年代以降から顕著にみられるようになった、新たな受容の形を比較する。ゴスペルは主に先行研究で明らかにされてきた日本の事例、キールタンは筆者が調査した北アメリカ(カナダ)の事例を扱う。

1. 宗教音楽としてのルーツ

1-1. ゴスペル

ゴスペルは、キリスト教プロテスタント系の礼拝音楽の一様式である。「ゴスペル」とはキリスト教の教義や福音を意味し、「ゴスペル音楽」は「福音を歌った歌」全般を意味する。ただし、本稿では特にプロテスタントの賛美歌とアフリカ独特の音楽的感性が融合して生まれた「ブラック・ゴス

ペル」のジャンルを指すこととする。

17世紀から、奴隷船で次々にアフリカから北アメリカ大陸に強制連行された黒人奴隷たちは、南部州のプランテーションで過酷な労働に従事した。当時、奴隷たちのキリスト教化には賛否両論があったという。しかし、1730-40年代にアメリカ北東部を中心に復興運動「The Great Awakening」（第一次大覚醒）が起こったことで、黒人奴隷たちの間でキリスト教が急速に広まった。イギリスから来たメソジスト派の伝道者、ジョージ・ホウィットフィールド（George Whitefield, 1714-1770）に代表されるように、この復興運動の伝道者はより心情に訴えかけるような新しい説教を行ったことで、多くの情熱的な信者を獲得した。

当初、言語を奪われた奴隷たちは共通の言葉をもたなかったため、「リング・シャウト」というアフリカ文化由来の、円状になって歌い踊る、熱狂的な宗教表現を行っていたという。それが次第に、「スピリチュアル」（霊歌）に発展していったといわれる。一般に「スピリチュアル」とは、聖霊を感じたときに歌う宗教歌を指す。しかし、中でも、キリスト教を受け入れた奴隷たちが自然発生的に歌うようになったスピリチュアルが、いつしか白人たちのそれと区別されるようになり「ニグロ・スピリチュアル」と呼ばれるようになった〔北村 2000：26〕。ニグロ・スピリチュアルには純粋な宗教歌としてだけでなく、日常的な出来事を歌うことで現実の苦しみを乗り越え、解放されるまでの希望をつなぐ機能が加わっていったという〔北村 2000：140-143〕。

黒人たちの多くはプロテスタントの中でもバプティスト派やメソジスト派に多く属した。19世紀半ば、南北戦争の前頃には組織化された黒人教会が見られるようになったが、「正統」な礼拝形式を重んじる教会ではこうしたニグロ・スピリチュアルは「スレイヴ・ソング」（奴隷の歌）と呼ばれ「民謡」としかみなされなかったという。しかし、1862年の奴隷解放宣言公布以降、スピリチュアルは次第にコンサート・ミュージックとして発展し始めた。先駆的な歌手たちの活躍により、1920年代までに、世俗的な要素も盛り込みながら独自の音楽様式に発展し、1930年代からジャズの要素を取り入れた「モダン・スピリチュアル」が今日の「ブラック・ゴスペル」へと変化したのである。

1-2. インドの宗教歌謡キールタン

次に、キールタンの宗教音楽としてのルーツについて述べる。「キールタン」の名称はサンスクリット語の (*kīrti*) から来ており、字義的には「唱える」という意味を持つ。インドでは神々の名号やマントラ（真言）など神聖な言葉に大いなる力が宿ると信じられており、繰り返しそれらを書く、想念する、唱えるといった類の宗教実践が多くみられる。そのうち、キールタンは神の名号、マントラ、短い賛辞に旋律やリズムをつけた音楽性の高い実践であり、インドでは一般的な宗教歌謡のジャンルの一つでもある。

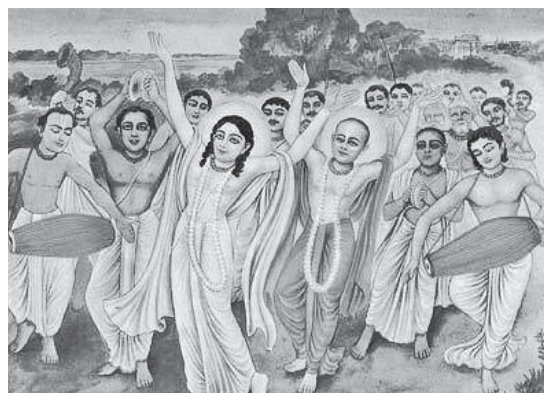
ヒンドゥー教の教えによれば、今我々が生きている時代はカリ・ユガ²⁾と呼ばれる一種の末法時代にあたり、民衆が最も容易に救済を得られる方法がキールタンであるといわれる。10世紀頃成立したと言われる聖典『バーガヴァタ・プラーナ』には「神の名号を繰り返し唱えることによってより大きな帰依の道に至る」という記述が見られる。この思想は中世のインドで開花したバクティ（信

愛)運動期に民衆に「宗教実践」として広まった。

因みに「バクティ」とはヒンドゥー教の重要概念で、神に絶対帰依し、肉親に対するような無条件の愛を捧げることで救済が得られるとする教えである。従来、神との交信は司祭カーストであるバラモンが独占し、「神聖」なサンスクリット語で書かれた難解な教典の理解なしには解脱に到達できないと考えられていた。しかし、バクティ運動の指導者たちは地域言語によって説教し、詩を音楽に乗せて民衆に語りかけた。知識や理論よりも感覚や心情に訴えたことでこの宗教運動はカーストの上下にかかわらず爆発的に普及したのである。なお、バクティの観念は、神(絶対者)と人(個我)との別異性を前提として成立している[橋本・宮本・山下 2005: 106]。ヒンドゥー教の神々は人格神であり、例えばヴィシュヌ神の化身クリシュナ神は一般にハンサムな男性として描かれ(図1)、信徒は男性・女性にかかわらず女性とみなされ、神に対して恋人のような愛情を捧げることにより合一を願う。この思想は特に「甘美のバクティ」(マドゥラ・バクティ)と呼ばれ、文学や芸術の分野に多大な影響を与えた。



(図1) クリシュナ神とラーダーのイメージ画
出所: brajprarthna.blogspot.com



(図2) 聖者チャイタニヤとサンキールタン
のイメージ画
出所: www.bvml.org

また、今日、キールタンの歴史を語る上で必ず言及されるのが、15世紀のベンガル地方で活躍した聖者チャイタニヤである(図2)。彼はヴィシュヌ派のバラモン家庭に生まれ、家族を相次いで亡くした後に宗教的改心を経て、クリシュナ神を至高の神として熱心に崇拜するようになった。クリシュナは神話の中でしばしばプレイボーイとして描かれるが、その中でも最愛の恋人ラーダーとの愛情は超越的である(図1)。帰依者にとって解脱とはラーダーとクリシュナの神々しい愛の遊戯(リーラー)を精神的な、すなわち完成された身体で至福感を伴って常に経験することである[橋本ほか 2005: 126]。

チャイタニヤが始めた集団のキールタンは「サンキールタン」(現地のベンガル語ではシヨンキルトン)と呼ばれ、クリシュナ神の名号を繰り返し唱えることにより、恍惚感に陥るという礼拝のスタイルを確立した。チャイタニヤの樹立したガウリーヤ・ヴァイシュナヴァ派は、後に言及する欧

米でのキールタン受容に深くかかわっている。

2. 音楽的側面

2-1. ゴスペル

今日のゴスペルは実践機会により、ソロ、コーラス・グループ、カルテット、クワイア（聖歌隊）など様々な演奏スタイルが見られ、それぞれのバリエーションが存在する。ここでは教会やステーションなどで実践される、一般的なゴスペル・クワイアを例に、その音楽的特徴を抽出してみたい。ただし、教会での礼拝形式の説明は紙幅の都合上省略する。

クワイアの規模は数十人から100人を超えるマス・クワイアまで様々である。しばしば、ディレクターと呼ばれる指揮者やリード・ヴォーカルを伴う。伴奏にはピアノや電子オルガンが最もポピュラーで、他にタンバリン、ドラム、エレクトリック・ギターなど様々な楽器が用いられる。ゴスペル・クワイアは和声を重視し、多くの場合ソプラノ、アルト、テナーの3パートに分かれて斉唱する。アップテンポの曲では手拍子が取られる他、身体をゆすったり足踏みをして全身全霊でゴスペルを歌う。しかし、こうした自発的な身体動作を伴うスタイルが全ての黒人教会で見られるわけではなく、アメリカの大部分の「正統」な礼拝形式を重んじる教会ではむしろタブー視されているという。

リード・シンガーはしばしば、その歌唱力で聴衆を陶醉させることがある。歌はシャウトという叫びの行為や、メリスマと呼ばれる表情豊かで装飾的な旋律に特徴づけられ、高度な技術を要する。しかし、「すぐれた歌手は、どんな平凡な詞句でも、だれの人生にもあてはまるものに変えてしまう」[ヘイルバット 2000:17] というように、本来、リード・シンガーのクワイアでの役割は会場を神への賛美の方向に導くことである。

なお、クワイアは本来、礼拝の一部であり牧師による説教は不可欠である。説教者は淡々と話すのではなく、詩を朗読するようにリズムカルかつ巧みな弁舌で会衆を惹きつける。会衆がその合間に絶妙なタイミングで神を讃える言葉を合いの手として入れるところも、ゴスペルならではの特徴であろう。

楽曲面では、ニグロ・スピリチュアルの時代には旧約聖書を題材にした歌が歌われることが多かったという。旧約聖書にはイスラエルの民が神と交わした約束事が記されており、奴隷たちは出エジプト記のストーリーの中に自分たちの境遇を重ねたからではないかといわれている。

以下、スピリチュアルの例として、「ヨルダン河よ、堂々と流れよ」(Roll, Jordan, Roll) の歌詞を[北村 2000] から一部抜粋する。

Roll, Jordan, roll, roll, Jordan, roll,	とうとうと流れよ、ヨルダン河よ、はるか彼方へ、
I want to go to heaven when I die,	私はこの世を去るとき、天国へ行きたい。
To hear Jordan roll.	ヨルダン河の流れを聞くために。

一方、今日のゴスペルの歌詞は主に新約聖書を題材にしており、その内容は多彩である。

2-2. キールタン

次にキールタンの音楽的側面について述べる。キールタンはインド国内外のヒンドゥー教やシク教の寺院、家庭、公の場など様々な機会^でで頻繁に実践されている。多くの場合、専門のグループが演奏を担う。一般的な編成では主唱者、サポート歌手、伴奏者数名から成る。演奏者は床に座し、伴奏には西洋由来の^{ふいこ}鞆付きの鍵盤楽器ハルモニウムや、両面太鼓のムリダング、小型シンバルのカルタールなどが用いられる。リーダーが一節を歌うごとに参加者が唱和するが、ユニゾンで歌い、基本的に混声はない。

基本的にキールタンの構成は非常にシンプルである。以下に、よく知られているキールタン「Govinda Jaya Jaya」を例に音楽構造を示す。

Govinda Jaya Jaya	(クリシュナ神に勝利を)
Gopala Jaya Jaya	(クリシュナ神に勝利を)
Radharamana Hari	(ラーダーの恋人である神よ)
Govinda Jaya Jaya	(クリシュナ神に勝利を)

1. 主唱者はまず、最もシンプルな旋律 A で 4 行をひとまとまりの歌詞として歌い、参加者がそれを同様に復唱する。旋律は多くの場合、即興である。
2. 旋律 A で何周期か反復した後、主唱者は同じ歌詞を用いて異なる旋律 B に移行し、参加者も同様に復唱する。
3. 同様に旋律 C、時には D まで移行し、次第にテンポが上がっていく。歌唱が盛り上がり、最高潮に達した後、多くの場合は A に戻り、スローテンポで何周期か反復された後に終了する。

このように、キールタンはいくらでも長くつなげてゆくことができる歌唱形式を持つのが特徴で、何時間も歌い続けられることも珍しくない。誰にでも覚えやすく特別な練習の必要はないが、このように「歌い続けること」を目的化することによって肉体的・精神的な修行のような様相を呈することもある [田中 2008 : 63-64]。

しかし、キールタンを集団でかつ長時間にわたって実践するために、主唱者には音楽的な素養のみならず、しばしば合間に説教を行う知識や聴衆を惹きつけるカリスマ性などが必要となってくる。これは宗教実践の場でもライブなどの舞台でも同様で、リーダーは参加者を鼓舞し、場に一体感をもたせる必要がある。また、演奏者は伴奏楽器の関係で、基本的に座したままであるが、場の

雰囲気が高揚してくると参加者らは手拍子をとったり、立ち上がって身体を揺らしたり、踊ったりする様子が見られる。熱狂的に全身で表現する人もあれば、目を閉じ、身体を揺らしながら陶酔の境地に入っていく人など様々である。

3. ゴスペルの変容

3-1. 「ゴスペル・ソング」の確立と発展（1920年代～60年代）

20世紀初頭、南部から黒人たちは北部の都市部に移住し、彼らはアメリカ社会の最下層を形成していった。ゴスペルはそうした人々の心の拠り所となる音楽であり、黒人コミュニティ以外で受容されることはまだなかった。黒人教会ですら、牧師はゴスペルを礼拝に採用せず、受け入れられるようになったのは1920年代頃からといわれる〔北村 2001：282〕。

次第に、先駆者の尽力により1920-30年代のアメリカでゴスペルはポピュラー音楽としての形を整えていった。初期のゴスペル作曲家としては、奴隷から身を起こして革新的な音楽を創り出した〔塩谷 2010：44〕ティンドリー師（C.A. Tindley, 1851-1933）、ゴスペル・ソングの父と呼ばれ、千曲以上の楽曲を書いたドーシー（Thomas A. Dorsey, 1899-1993）らがいる。ドーシーは1920年代後半に、ブルースやジャズのリズムを取り入れ、ピアノ伴奏を導入した他、現在の「ゴスペル・ソング」のタームを定着させた功労者である。

終戦以後、1945年から60年代半ばはゴスペルの黄金時代と呼ばれる〔ヘイルバット 2000：33；Darden 2004：221〕。才能豊かなゴスペル歌手が多く輩出され、ソロ、カルテットなどそれぞれのスタイルを築き、シカゴなどの都会を中心に華々しく活躍した。中でも、ゴスペル史上、最も偉大な女流歌手といわれるマハリア・ジャクソン（Mahalia Jackson, 1911-72）（写真1）は目覚ましい成功を収めた。彼女はニューオーリンズの敬虔なバプティスト信者の娘として生まれ、家が貧しかったため早くから北部に出稼ぎに出た。圧倒的な歌唱力と型にはまらない自由な表現力をもつ一方で、信仰の深い歌手として知られ、幼少時に教会で歌った素朴な賛美歌を常にレパートリーにしていたと伝えられる。

3-2. コンテンポラリー・ゴスペルの時代へ（1970年代以降）

先に述べたように20世紀半ばはゴスペルの黄金時代であった一方で、1955年からは公民権運動が広がり、公共施設における人種差別問題は改善されないままであった。1960年代初頭までは大衆音楽は社会階層と不可分の関係にあり、いかにゴスペル歌手が成功したとしても、「主流」の音楽市場に食い込んだとはいえなかった。黒人音楽であるブルース、リズム&ブルース、ジャズは「人種音楽」（race music）と呼ばれ、はっきりと社会階層的線引きがなされていた³⁾。

そのような中、今日「ゴスペル音楽の王」として知られるクリーヴランド師（James Cleveland, 1932-91）は、既存のゴスペル・クワイア（聖歌隊）の音楽を発展させ、「綿密なハーモニーと快活なリズム」で今日のスタイル（写真2）を確立し、アメリカポピュラー音楽文化で高い評価を得た

(写真1) マハリア・ジャクソン



出所：Yahoo Music

(写真2) 今日のゴスペル・クワイアの様子



出所：<http://www.itissacred.ca/join/>

[Darden 2004: 271]。また、彼は1968年に若いゴスペル歌手や楽器演奏者のためにアメリカ・ゴスペル音楽・ワークショップ (Gospel Music Workshop of America, 以下, GMWA) を立ち上げ、毎年コンヴェンションを開催し後進の育成に努めた。クリーヴランドに多大な影響を受けた歌手の一人であるエドウィン・ホーキンス (Edwin Hawkins, 1943-) は Edwin Hawkins Singers として1969年にシングル曲 “Oh Happy Day” (オー・ハッピー・デイ) をリリースし、全世界で700万枚以上を売り上げ、グラミー賞を受賞した⁴⁾。この曲は18世紀の賛美歌をホーキンスがアレンジしたものだという。以下に歌詞の一部と対訳例を示す。

Oh Happy Day	おお、幸せなる日
When Jesus washed	神が私の罪を清めたもうた
He washed my sins away!	神が私の罪を清めたもうた
He taught me how to match	神は教えたもうた
Fight and pray, fight and pray	調和を、努力を、祈りを
And live rejoicing day	そして喜びに満ちた
Free day, every day	自由な日々を

出所：<http://www.chorus-song.com/gospel-music/oh-happy-day.htm> より抜粋

80年代は大人数で構成されるマス・クワイアが隆盛し、1990年にはメジャー・レーベル7社がゴスペル部門を創設したと共に、インディーズ・ゴスペル・レーベルの数も増加し、ゴスペルは音楽市場のなかでメイン・ストリームに食い込む存在となった [塩谷 2010: 53]。このように、黒人コミュニティの心の拠り所であったスピリチュアルは、世俗的な音楽の要素を取り込みさまざまなスタイルを編み出しながら、20世紀後半にはグローバルな「ポピュラー音楽」へと変貌を遂げたのである。

4. キールタンの変容

4-1. キールタンと西洋の出会い（1960年代後半～80年代）

欧米においてキールタンの受容が顕著に見られるようになったのは1960年代後半以降である。当時、アメリカの若者の間ではベトナム反戦運動、黒人解放運動、女性解放運動が高まっていた。これは「主流」を形成するアメリカ中流社会の価値観への反発を核とした、若者を中心とする「対抗文化」(カウンター・カルチャー)の一大社会現象に発展し、ロックやフォークなどの新しい音楽、文学、映画、絵画や写真などあらゆる文化に及び、ヒッピーと総称される若者たちが主な担い手となった。高度経済成長によって助長された物質主義を否定したヒッピーたちは、インドのヨーガや日本の禅など、東洋のホリスティックな価値観を重視する精神・身体修養実践に憧れを抱き、インドはこれらの若者たちの「聖地」となった。軌を一にして、インド人ヨーガ行者たちは欧米での活動を積極的に展開していった [井上 2007: 80]。

中でも、聖者チャイタニヤの流れを汲む A.C. バクティヴェーダーンタ・スワームイー・プラバパーダ (本名: アバイ・チャラン・デー, 1896-1977) (写真3) が「クリシュナ意識国際協会」(International Society for Krishna Consciousness, 以下、ISKCON) を立ち上げたことで、キールタンが広く知られるきっかけとなった。彼はクリシュナをヒンドゥー教の神の一人ではなく超越した存在として信奉し、キールタン実践を信仰の支柱に据えてクリシュナの名を一心に唱えることで輪廻の生存から脱することを説いた。欧米の若者たちが続々と入信し、信徒らはサフラン色のローブやインドの腰巻を身に着け、太鼓や小型のシンバルを打ち鳴らしながら路上でマントラ (真言) を唱え、踊り練り歩いた (写真4)。この現象はそのマントラの歌詞から「ハレー・クリシュナ運動」とも呼ばれ、ニューヨーク、イースト・ビレッジの風物詩ともなった [橋本ほか 2005: 384]。

(写真3) A.C. バクティヴェーダーンタ



出所: 『Back to Godhead』 Vol.12
(1977年11月)

(写真4) ISKCON 信徒のキールタンの様子



出所: <http://iskcon.org>

ISKCON は、インドの精神世界に深く傾倒していたビートルズのジョン・レノン (John Lennon,

1940-1980) とジョージ・ハリスン (George Harrison, 1943-2001) が活動に賛同したことで飛躍的な知名度を得た。特に後者は信徒らからキールタンを習得し自らの音楽活動のキャリアと連動させていった。69年から71年にかけてハリスンがリリースしたソロ・シングル「Hare Krishna Mantra」(ハレー・クリシュナ・マントラ)、「Govinda」(ゴーヴィンダ)、アルバム『*Radha Krishna Temple*』(ラーダー・クリシュナ・テンプル) はすべて ISKCON と深く関係する。

文化的側面から見れば、この時代において、インド生まれの宗教歌謡であるキールタンが、一時的にせよメジャーな音楽市場を通じて拡散したことは、対抗文化の隆盛やビートルズの影響力なくしてはありえなかっただろう。しかし、宗教的側面から見ると1960年代以降の欧米、特にアメリカにおける宗教的動向も深くかかわっていることがわかる。当時、アメリカの「主流」の信仰といえ、プロテスタント派、カトリック派、これらの分派およびユダヤ教組織、東方正教会などが挙げられる [Miller 1995: 2]。しかし、不安定な社会情勢の中でこれらの信仰への不信感が高まり、「オルタナティブ」な信仰や心の拠り所が求められるようになった。伝統的な宗教的権力が実体を伴うほどに分散し [Miller 1995: 8]、従来には考えられないほど多様な「非キリスト教」由来の宗教団体が続々登場し、ISKCON もその一つとして受け入れられたのである。

4-2. キールタン・ジャンルの確立 (1990年代後半～2000年代初頭)

ハレー・クリシュナ運動は77年にバクティヴェーダーンタが亡くなったことで、カリスマ指導者を失い、次第に縮小していった。一方で、60-70年代にインドでキールタンに出会ったヒッピーの若者たちが、90年代に「西洋生まれのキールタン歌手」として頭角を現してくる。2000年代には「キールタン」の名を冠したCDが急増し、中でも、クリシュナ・ダス (本名: ジェフリー・カーゲル, 1947-) が2005年にリリースしたアルバム『*Pilgrim Heart*』は、当時25万枚の売り上げを記録した。また、彼と並んで今日最も知られているキールタン歌手のジェイ・ユータル (本名: ダグラス・ジオン・ユータル, 1951-) は2002年にグラミー賞にノミネートされている。彼らの功績は、キールタンの音楽的側面を発展させ、聴衆のすそ野を広げたことである。すでに述べたように、キールタンはそのシンプルな音楽的構造ゆえに、アレンジのバリエーションには限りがない。フォーク、ロック、ジャズ、レゲエ、ソウルなどあらゆる音楽ジャンルとの融合が試みられた。また、楽器に関しても非常に柔軟である。インドでのキールタン演奏は、今日でも主唱者が鍵盤楽器のハルモニウムを演奏しながら歌う伝統的なスタイルが好まれるが、欧米ではアコースティック・ギターの使用もよく見られる。また、ソロ演奏からバック・コーラス、オーケストラ編成まで演奏スタイルは様々である。

このように、1960年代後半、対抗文化を発端とした欧米におけるキールタンの受容は、インドのスピリチュアリティに目覚めた若者たちによって担われ、2000年以降はグローバル音楽市場で幅広い関心層を獲得した。しかし、再びキールタンが人気を博した現象にはどのような背景があるのだろうか。これに関しては次章で詳述する。

5. 新しい受容の形（1990年代後半～現在）

5-1. ゴスペルの日本での受容

アメリカ黒人のゴスペル・ソングの様式は、南アフリカからオランダ、韓国に至るまで、クリスチャンに広く受け入れられ実践されている。ただし、日本におけるクリスチャン人口は極めて少ないことから、ゴスペル音楽は、宗教音楽としてではなく、サークル活動や習い事・趣味として普及している [早稲田 2016: 125]。1960年代からゴスペルが人気を集めるようになり、既に言及したマハリア・ジャクソンはコロンビア・レコードから4枚のLPをリリースした他、1971年に来日コンサートを行っていた [Waseda 2013]。しかし、ゴスペルが本格的なブームとなり始めたのは、1990年代後半であるとみられる⁵⁾。何がその火付け役となったのだろうか。

ゴスペルを始めたきっかけとしてよく見聞きするのは、1993年に公開されたウーピー・ゴールドバーグ主演の『天使にラブソングを…』1, 2 (原題: Sister Act 1, 2) を見て、というものである。90年代初頭からGMWA (既出) の日本支部でゴスペルのワークショップを開催してきたディレクターのラニー・ラッカーも、この作品を通してゴスペルを習いたいという日本人の要望に応えたと述べている [塩田 2010: 86]。

この作品は、コメディ・タッチのヒューマン・ドラマであり、ゴスペル・クワイア (聖歌隊) を通じて仲間の絆が育まれる過程が描かれ、ポジティブで爽快な印象を受ける。映画の中ではいくつかの楽曲が披露されるが、厳密にはゴスペルといえるものはその一部であることが指摘されている [Waseda 2013]。内容の真偽はさておき、ブラック・ミュージックに親しんでいない人々を巻き込むほどに多大な影響を与えた点は特筆に値するだろう。

また、この映画作品の他に、90年代から2000年代前半にヒップ・ホップやリズム & ブルースなど、ブラック・ミュージックが大流行したことや、ア・カペラを特徴とする日本人グループが有名になったことも、ゴスペルの人気と相関関係にあることが類推される。いずれにしても、当時ゴスペルを習い始めた人々のほとんどが「宗教音楽」としてではなく、メジャーな映画作品やポピュラー音楽の影響を受けて関心をもったことが非常に多かったことは重要である。

ここで、90年代にゴスペル・サークルに入った方への聞き取り調査から、当時の状況のイメージをふくらませてみたい。インフォーマントのAさんは、日本人女性 (1997年当時20代)、非クリスチャンである。2つの教室でゴスペル音楽を学んだ経験がある。

(質問1) ゴスペルを習い始めたきっかけについて

1997年に有名なゴスペル・クワイアに参加した。ちょうど人間関係などさまざまな悩みがあり、それまでの自分から変わりたいという思いがあり、その前後の数年間には背伸びして映画を観たり音楽を聴いたりしていた。ブラック・ミュージックのスタイルに惹かれ、ドキュメンタリーを観たりライブに通っていたところ、都内にある教会を中心に活動していたゴスペル・クワイアのコンサートを観た。初心者でも練習に参加できるとのことだったので、勇気を出して参加を決

めた。

(質問2) ゴスペル・クワイアの参加層について

参加したクワイアには音楽大学、音楽専門学校出身でもともとブラック・ミュージックに関心があり、音楽の仕事がしたいというメンバーが多かった。また、クリスチャンになった方も数人はいたが、非クリスチャンが多かった。年齢層では20代から30代、クワイアの中では女性の比率が高いもの、通常の社会人サークルに比較すると男性も多い方だと思う。

(質問3) 教室を移ったのはなぜか

初心者歓迎とあったものの、自分にはレベルが高すぎたので、楽器会社が展開する音楽教室のゴスペル・クラスに移った。これは社会人クラスであったため、20代から子育てが一段落した40～50代の主婦まで幅広い年齢層の人が習いにきていた。女性が多く、テナーパートも女性が歌っていた。音楽専門ではないが「もともと歌うのが好き」という人が集まっていたと思う。指導者はクリスチャンで、参加者はほぼ非クリスチャンだった。

(質問4) ゴスペルを習う前と後の印象の違い

そもそも自分がゴスペルに参加した理由がゴスペルの発声、リズム、歌詞という音楽スタイルに惹かれたということ以外に「自分を変えたい」という漠然とした思いがあった。この気持には「内向的な自分ではいけないのではないか」という悩みが含まれており、一方でゴスペルに「外向的な人間」というイメージが重なっていた。結局、ゴスペル・クワイアに参加したり、プロのアーティストのライブを鑑賞したり、CDを聴いたりしたからといって「外向的な人間」にはまったくなれなかったが、「自分を変えたい、変えなければいけない」という気持ちは薄れていき、ありのまままでよいという気持ちになれたと思う。

以上の回答で特に筆者が加筆した下線部を見るように、Aさんがゴスペル・サークルの現場に実際に足を運んだ動機としては、音楽的な憧れもあったが、「自分を変えたい」という気持ちが動機となったようだ。彼女はゴスペル音楽を歌うことに「外向的な人間」というイメージを重ねており、それを習得することで自分も変化できるのではないかと、といった何らかの「期待感」があったといえよう。ここには先に述べた映画作品に見られる、ゴスペルのポジティブなイメージが反映されている。実際、ゴスペル愛好家のホームページやブログを見ると、圧倒的に「楽しい」「一つになれる」といった感想が多く見られ、満面の笑顔で歌っている人々が非常に印象的である。

また、上記の回答からは、ゴスペルを習っていた時の個人的な感想だけでなく、当時の日本におけるゴスペルの普及状況や参加者の傾向も垣間みえる。以下、要点を抽出して表にまとめてみよう⁶⁾。

(表1) 都内ゴスペル教室参加者の傾向 (90年代後半～2000年頃)

主な年齢層	20代から50代
性別	女性の比率多い
習い始めた経緯	ブラック・ミュージックが好きである 歌うことが好きである 外向的なイメージに惹かれた
習得の場	教会、楽器会社の音楽教室、カルチャーセンター 高いレベルから初心者向けまで選択肢が豊富
宗教的背景	非クリスチアンの比率高い

聞き取りをもとに筆者作成。

次に、礼拝で歌われる賛美歌、という宗教的側面が捨象されボーダーレス化したゴスペルが、非クリスチアンの日本人にどのように再解釈され、新しい「価値」を見出されるようになったのか、先行研究や普及団体の考察からも見て行こう。

日本におけるゴスペルの受容を研究した早稲田は、アンケート調査結果から「ゴスペル音楽は親密なコミュニティに属しているという感覚を創り出し、歌手の感情を解放し、強さと勇気をもたらす」とした。その上で、これを「アフリカ系アメリカ人教会における宗教的体験の変容した形」になぞらえられるのではないかと考察している [Waseda 2013: 193]。

また、日本におけるゴスペルの普及に努める「日本ゴスペル音楽協会」の設立趣旨によると「ゴスペル音楽」を共に学ぶことは共に歌う仲間との〈一致感〉を醸成しますし、協力し合ってパフォーマンスの質を向上させていくことは〈達成感〉に繋がります。互いに〈情熱〉をもって「ゴスペル音楽」に取り組むことは素晴らしい〈友情〉を育んでいくこととなります⁷⁾。

さらには、今日では高校の合唱コンクールなどでもゴスペルの注目は高まっている他、日本各地のカルチャーセンターで講座が見られるように老若男女が参加できる音楽であることがわかる。

このように、すでにゴスペルは一宗教音楽の枠組みを越えた「汎用性」の高い価値を見出されているといえる。つまり、日本人におけるゴスペルの持続的な人気は、賛美歌で神を讃えるということよりも、全身全霊で歌うゴスペルの合唱スタイルがもたらす感動や満足感を共感したいという期待の表れではないか。先のAさんがゴスペルを歌うことで自分への否定感情が消え、自己受容につながったと述べていることから、ゴスペルには悩みや不安から解放されるといったポジティブな感情が促される「効果」もあるようだ。無論、他にも個人によっては「祝福」や「大なる愛」といった神聖さを強く感じる人もいるだろう。個人差はあるにせよ、圧倒的に非クリスチアンが多い日本においてはゴスペル音楽のユニバーサルな「価値」が多くの実践者に実感されてきたことで、単なる合唱とは異なる特別な位置づけを与えられ、持続的な受容につながっていることは間違いないだろう。

5-2. キールタン・ヨーガの流行

次に、キールタンの新しい受容の形を検討する。前章で言及したように、「西洋生まれ」のキールタン歌手が90年代後半から活躍し始めたが、その背景は、音楽的関心の高まりというよりは「現代ヨーガ」の発展とより深く関係していたことがわかっている。ヨーガ業界は60-70年代の世界的な第一次ヨーガ・ブームを経て巨大市場となった。80年代にはエアロビクスダンスの大流行におされて人気を失ったものの、フィットネス効果の高い「現代ヨーガ」が多く生み出されたことで、ヨーガ業界は息を吹き返した。その一方で、ヨーガの精神的側面を重視する愛好家の注目を集めたのが、インド古来の「キールタン・ヨーガ」であった。元来、ヨーガは精神修養の方法であり、瞑想が中心である。本来のキールタン・ヨーガとはヒンドゥー教の信仰概念に基づき「神の名号を繰り返し唱える」ことにより深い瞑想に至り、結果的に高次の状態に到達し、解脱に至ろうとする実践である。

無論、「現代」のキールタン・ヨーガは古来の実践をそのまま踏襲するものではない。2000年の『ヨガ・ジャーナル』によれば、「古いものは再度新しいものとなる。チャンティング（キールタンと同義）はアメリカ中のヨーガ・スタジオの人気者だ」というコピーが見られる〔*Yoga Journal* 2000 (5-6)〕ように、誰もが行なえる方法であることが推察される。

それでは、「再発見」されたキールタン・ヨーガとはどのようなものだろうか。ここで4-2で言及したクリシュナ・ダスが再び登場する。彼は歌手として活動する傍ら、先駆的なヨーガ教室でキールタン演奏をして生計を立てていたという。その状況は次のようなものである。

スタジオには40人ほどのヨーガ受講者が座している。クリシュナ・ダスが、インドで師事した高名な聖者について少し話したあと、静寂があり「シュリー・ラーム ジェイ・ラーム ジェイ・ジェイ・ラーム」（ラーマ神に勝利あれ）と歌い始めると、受講者達が若干ためらいがちに「シュリー・ラーム ジェイ・ラーム ジェイ・ジェイ・ラーム」と唱和する。何度かのコール・アンド・レスポンスの後、北インドの打楽器タブラ奏者が伴奏に参加し始める。最初の30分は皆、座って唱和していたが、次第に皆立ち上がり、踊り、足踏みを始め、思い思いに身体を動かすようになったという。一つのキールタンに30分ほどかけた後、静寂があり、再び短い話の後、次のキールタンが行われるというパターンが数時間にわたって繰り返された〔*Yoga Journal* 2000 (5-6) : 88-93〕。

現在、欧米における「典型的」なキールタン・ヨーガはこのような形態を踏襲している。「神聖な音楽を通じて瞑想する」というスタイルが人気を呼び、それまでキールタンを全く導入していなかったスタジオでも98年頃からキールタン奏者を招いて演奏したり、少なくともクラスの最初に数分のキールタンを導入するようになったという〔*Yoga Journal* 2000 (5-6) : 93〕。

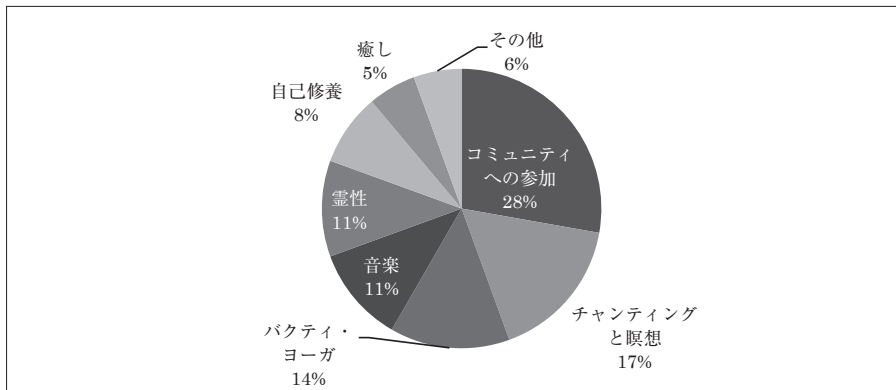
キールタン・ヨーガの流行以降、北アメリカを中心にキールタンは様々なイベントで実践されるようになった。それでは、今日、キールタンがどのような場で、どのような人々によって担われているかを事例に基づいてより詳しく見て行こう。以下は、2016年にカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバーにおいて筆者がアンケート調査を行った、キールタン・イベント“EnChant”の趣旨説明である。このイベント名は「魔法をかける＝エンチャント」と「唱える＝チ

ヤント」をかけている。

- ・「EnChant…」は偏見なく広い心をもつ魂（ソウル）達が、コール&レスポンスのチャンティングを行う気軽な集まりです。
- ・キールタン/マントラ瞑想法はバクティの道に至るプロセスです。伝統的なキールタンではハルモニウム（^{ふいこ}輔付きの鍵盤楽器）、伴奏者2人はムリダングとカルタールが用いられます。マントラおよび、古の魂の指南書である『バガヴァット・ギーター』の教えについてレクチャーがあります。魂、意識、カルマ、輪廻転生、前世そして瞑想などのトピックを学びます。
- ・フレンドリーな雰囲気の中でリラックスしてくつろいで下さい。聴いて、鑑賞して、思う存分歌って下さい！スピリチュアルな実践方法にかんする疑問、気づき、ディスカッションも歓迎です。

このキールタン・イベントの趣旨説明では、特定の宗教に偏らないスピリチュアリティを提示すると共に、開放的で気軽に参加できる空間であることをアピールしている。一方、聖典『バガヴァット・ギーター』や「カルマ（業）」といったタームによって主催者側がヒンドゥー教やインドの思想を基盤としたグループであることが示唆される。

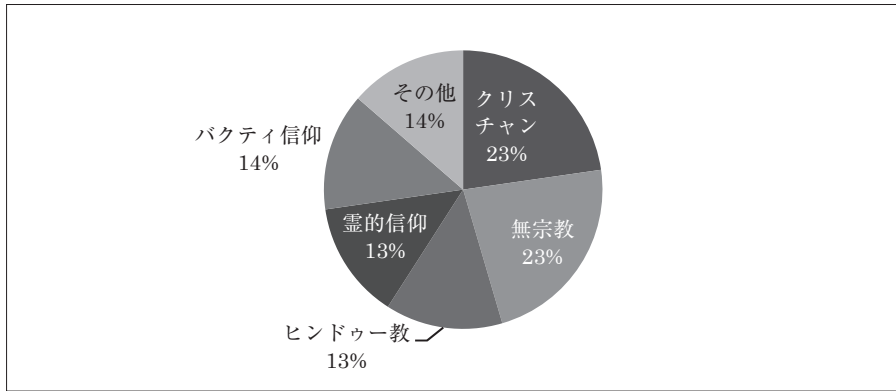
次に、参加者の動機について、44名（20代～40代、男女比5:5）を対象に行ったアンケートの結果を示す。



(図3) キールタン・イベントへの参加動機 アンケートに基づき筆者作成。

この結果によれば、実践者はキールタン・ヨーガの音楽的側面よりも、友人との付き合いや霊性（スピリチュアリティ）に関心をもつ人々との出会いを求めて参加しているようである。また、種類は異なるものの何らかの精神修養の方法として認識している人が約半数を占めていることから、本来のキールタンがもつスピリチュアルな側面は完全には捨象されずに残っていることがわかる。

次に、各参加者の宗教的背景を見てみよう。



(図4) キールタン参加者の宗教的背景 アンケートに基づき筆者作成。

この結果から、参加者は約3割がヒンドゥー教あるいはインド思想を背景としてキールタンを実践しているものの、特定の宗教をもたない人々が約5割、またキリスト教が約2割と分かれた。周知のようにカナダは多文化共生主義を唱える多民族国家であり、2011年のセンサスによれば、キリスト教徒が約半数を占めるものの、仏教、ムスリム、シク、ヒンドゥーの存在感も大きく、また約4割が「無宗教」と回答している⁸⁾。ただし、現地では、筆者が調査を行ったイベントに限らず、「スピリチュアル」を謳った集会が多く、特定の宗教には属さないものの個々が精神向上に向けてさまざまな試みを行っているようである。

最後に、参加者たちがキールタンのどのような点に惹かれているか、という質問に対する自由回答の一部を示してみたい。

- ・マントラの力
- ・キールタンがもたらすエネルギーと喜び
- ・自分自身の深い部分とつながれること
- ・キールタンには精神を向上させる力がある
- ・チャンティングによって瞬時に平静でぶれない感覚になることができる
- ・キールタンは精神性を向上し、心を開く力がある
- ・瞑想とチャンティングによって“ゾーン”(感覚が研ぎ澄まされた状態)に入ることができる
- ・人種も地位も関係なくキールタンを通じてつながることができる
- ・音楽のバイブレーション、クリシュナの名号、平和な体験
- ・霊性、平穏、神聖で高次元な存在とのつながり

これらの回答は先の参加動機と重なっている部分があるが、参加者らは「スピリチュアリティ」を強く意識しており、キールタンを通じて、より高次元の精神性を獲得したいと考えていることが読み取れる。音楽的側面にはほとんどふれられていないが、「神の名号を繰り返して唱える」ことに優

れた音楽構造をもつキールタンだからこそ、容易に深い気づきや癒しを得られるという点を評価しているといえる。実際、音楽抜きでマントラを唱え続けることは非常に苦しいものであるが、音楽に乗せることで何時間も続けることが可能になるのである。

このように、インド由来の宗教実践キールタンは現代ヨーガの場で「再発見」されたことで新たな展開を遂げた。1960年代後半の受容に比べると、そこには「インド」や「ヒンドゥー教」という他者性はあまり感じられない。「キールタン」の有効性が実践者に認識され、現代のスピリチュアリティを重視する人々のニーズに即した形に再解釈されてきたといえるだろう。

6. 比較考察

最後に、ここまで得られた知見を以下の表にまとめる（表2）。

（表2）ゴスペル音楽とキールタンの比較一覧

比較の視点	ゴスペル音楽	キールタン
宗教音楽としての位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・キリスト教の礼拝音楽 ・神やイエスへの賛美・感謝 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒンドゥー教・シク教で重要な音楽的宗教実践 ・神の名号の詠唱
宗教音楽のルーツ	<ul style="list-style-type: none"> ・黒人奴隷時代のスピリチュアル 	<ul style="list-style-type: none"> ・カリ・ユガにおける救済の方法
音楽的側面での共通点	<ul style="list-style-type: none"> ・コール・アンド・レスポンス形式 ・多様な楽器の使用可 ・能動的な身体動作可（手拍子・踊り） ・多様な演奏スタイル 	
音楽的側面での相違点	<ul style="list-style-type: none"> ・混声あり、和声重視 ・シャウト、メリスマなどの技法あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・混声無し、和声なし ・基本的に地声
楽曲面での相違点	<ul style="list-style-type: none"> ・賛美歌 ・メッセージ性強い ・作詞・作曲家が判明するもの一部あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・神の名号や短いマントラの羅列など ・メッセージ性弱い ・作詞・作曲家不明
ポピュラー音楽としての位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・20世紀前半ジャンル確立 ・20世紀半ば「黄金時代」 ・20世紀末メイン・ストリーム入り 	<ul style="list-style-type: none"> ・1960年代後半～70年代に流行 ・2000年代前半にジャンル確立
受容・拡大のきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴスペル・クワイアの世界的な受容 ・メジャーな音楽・映画産業を通じた拡散 	<ul style="list-style-type: none"> ・キールタン・ヨーガの流行 ・「西洋生まれ」のキールタン歌手の活躍
「越境」先で変化した性質・新たに見出された価値の例（本稿で挙げた事例の場合）	<ul style="list-style-type: none"> ・非クリスチャンの実践者による受容 ・汎用性の高い音楽様式 ・前向きなイメージの定着 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な宗教的背景をもつ実践者による受容 ・精神的向上への有効性 ・高いスピリチュアリティ

これらのことから、グローバル時代における宗教音楽の「ボーダーレス化」には次のような傾向が見出せるといえよう。第一に、「宗教音楽」としてのルーツは保ちながらも、幅広い層に普及が可能な俗化を遂げており、世界的に愛好家を獲得していることである。

第二に、応用性・汎用性が高い音楽様式をもっていることである。人種・宗教・民族などの境界^{ボーダー}を越えて新たな受容の展開を遂げるには、あらゆる音楽ジャンルとの融合が容易であり、ポテンシャルが高い柔軟な音楽様式であることが望ましい。

第三に、制約が少なく、新たな担い手・実践者による再解釈が可能であることである。ゴスペルやキールタンはそれぞれ、「越境」先のニーズにあった価値を見出されたからこそ、関心層のすそ野を広げることができたのであろう。

グローバル時代の宗教音楽は、その音楽が育まれた文化的・宗教的背景をもたない「他者」に受容されることで新しい文化へと変化を遂げていく。個々に委ねられた解釈が普遍的な価値を生み出し、人々はそれに新たな可能性を見出すのである。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP26300039 の助成を受けたものです。

注

- 1) 2014年、2015年、2016年にバンクーバーにおいて、それぞれ数週間調査を行った。
- 2) インド思想における4つの循環期(ユガ)の最後にあたり、世界は墮落し罪がはびこる悪徳の時代とされる。
- 3) 「ボブ・ディランと対抗文化」<http://www.t-fukuya.net/dylan.pdf> より一部抜粋。(2017年9月7日最終閲覧)
- 4) 1969年当時、アメリカのシングル・チャートで4位、ドイツ、フランス、オランダで1位、イギリス、アイルランドで2位を記録した。
- 5) 日本におけるゴスペル音楽受容の歴史は[Waseda 2013]に詳しい。
- 6) 表のデータは、先行研究や文献で明らかにされていることとほぼ一致している(たとえば、[塩谷 2010; Waseda 2013])。
- 7) <http://j-gospelmusic.com/concept.html> 参照。(2017年9月10日最終閲覧)
- 8) www.statcan.gc.ca/eng/start (カナダ統計サイト) より、「2011 National Household Survey: Data tables」参照。(2017年9月10日最終閲覧)

参考文献 (アルファベット順)

- Darden, Robert. 2004 *People Get Ready! : A New History of Black Gospel Music*. New York: Continuum.
- Delciampo, Matthew J. 2012 *Buying Spirituality: Commodity and Meaning in American Kirtan*

- Music*, A Thesis submitted to the College of Music in partial fulfillment of the requirements for the degree of Master of Music.
- Dwyer, Graham and Richard J.Cole. 2007 *Hare Krishna Movement: Forty Years of Chant and Change*, London/ New York: I.B.Tauris & Co Ltd.
- 江瀬一公 2000 『文化人類学』放送大学教育振興会。
- 橋本泰元 / 宮本久義 / 山下博司 2005 『ヒンドゥー教の事典』東京堂出版。
- ヘイルバット、アンソニー (著) 2000 『ゴスペル・サウンド (改訂版)』中河伸俊 / 三木草子 / 山田裕康 (訳) BI Press。
- Hunt, Stephen J. 2003 *Alternative Religions: A Sociological Introduction*, Ashgate Publishing Company.
- 井上貴子 2007 『ビートルズと旅するインド、芸能と神秘の世界』柘植書房新社。
- Johnsen, Linda and Maggie Jacobus 2007 *Kirtan! Chanting as a Spiritual Path*, Yes International Publishers.
- 北村崇郎 2001 『ニグロ・スピリチュアル』みすず書房。
- Novetzke, Christian Lee. 2008 *Religion and Public Memory: A Cultural History of Saint Namdev in India*. Columbia University Press.
- 小尾 淳 2015 「欧米におけるインドの宗教歌謡「キールタン」の受容と展開—音楽、ヨーガ、スピリチュアリティ—」『大東アジア学論集』(15) : 50-64。
- Rosen, Steven. 2008 *The Yoga of Kirtan: Conversation on the Sacred Art of Chanting*, FOLK Books.
- 塩谷達也 2010 『(新版) ゴスペルの本』Yamaha Music Media Corporation。
- Slawek, Stephen M. 1988 “Popular Kīrtan in Benares: Some ‘Great’ Aspects of a Little Tradition” *Ethnomusicology* 32 (2) : 77-92.
- 1996 “The Definition of Kirtan: An Historical and Geographical Perspective” *Journal of Vaisnava Studies* 4 (2) : 57-113.
- 高松晃子 「10 ローカルとグローバル、アイデンティティ」『民族音楽学 12 の視点』徳丸吉彦 (監修) 増野亜子 (編) 音楽之友社、130-139。
- 田中多佳子 2008 『ヒンドゥー教徒の宗教歌謡—神と人との連鎖構造—』世界思想社。
- 塚田健一 2016 「11 グローバル化と著作権問題」『民族音楽学 12 の視点』徳丸吉彦 (監修) 増野亜子 (編) 音楽之友社、140-149。
- Waseda, Minako 2013 “Gospel Music in Japan: Transplantation and localization of African American religious singing.” *Yearbook for traditional music* 45 : 187-213.
- 早稲田みな子 2016 「9 越境・ディアスポラ」『民族音楽学 12 の視点』徳丸吉彦 (監修) 増野亜子 (編) 音楽之友社、116-127。
- (雑誌)

Yoga Journal 1975-2014 California Yoga Teachers Association.